

## 西鶴が描いた法華

山 上 生

五  
やがて、鐘ヶ崎に着着  
二人、身を婆し、次郎右を含め、なだめると、猿も  
簡門が煙草を刻めば、お蘭は木綿の枷を繰りなどしてひたすら草を合せて忙び入  
ほそぼそと生活の道をたどった。

被めが春公の一分と考へて、  
の仕業なれば……」と因果に至つたのは、まことに宿

二人、身を婆し、次郎右を含め、なだめると、猿も世不思議の妙縁と申すべきであつた。(終)

10月13日 (明治四一) △僧日 選舉(弘安五) △北平を北京改む(昭和大政奉還す(慶應三)

10月14日 (後白河法皇義仲に平氏討伐) △後水(△徳川慶

喜大政奉還す(慶應三)

即ち自ら咽喉を搔き切つて

煙なし、塔婆を建て、

火がて夫婦は愛兒を野邊

する。さかしき猿も日

強の寵愛をみか喜びづ、

山へ登つて薪などを採り、

不の實草の實を拾ひ來て一

人始仕する。誰もが

下僕の如くである。

かうして、ふふうちに月

は流れて、翌年の秋、夫婦

の仲に玉のさかな男兒を儲

してゐた。

と或朝のこと、近所か

招かれた夫婦は、愛兒を寝

かせたまゝ出向いたのであるが、その留守中、伴の猿

は菊之助に行水をさせやう

の思はくから、湯を沸

してゐた。

と或朝のこと、近所か

招かれた夫婦は、愛兒を寝

かせたまゝ出向いたのであるが、その留守中、伴の猿

